

「エコライフ」という生活者価値

生ごみ堆肥化は暮らしの何を変えるか？

吉野 馨子

Written by Keiko Yoshino

我が家の生ごみ堆肥化

野菜を切る。玉ねぎの皮など、乾いた部分は『燃えるごみ入れ』へ。芯など湿った部分はテラコッタ製の『生ごみ入れ』へ。食後、デザートにむいた果物の皮も生ごみ入れに。スイカなどの皮は、

大きいままでは腐りやすいため、細切りにする必要がある。家族の歯形の残った食べ残し部分を始末するのは何となく嫌なので、食べる前に皮の細切りまでやってしまう。湿り気の多い茶殻などは、古新聞などに包んでから『生ごみ入れ』へ。食べ残しや流しに溜まった「みも古新聞などに包み、また別の入れ物に仮置きする。

生ごみが溜まると、ペランダに置いたミミズ箱に放り込む。中のミミズはシマミミズといって、土中に生息するフトミミズなどと違い、生ごみをそ

のまま食べる種類であり、購入したものである。木箱の蓋を開け、様子を窺う。生ごみが形をほとんど失い、しんとしている。『ああ、調子良さそうだな』と思う。培土を混ぜてみて、ミミズがくねくねと動き回ると嬉しくなる。マンモラの混ざった匂いとした臭いがすると、要注意。かき混ぜてみると、きょうとアメリカミミズアブの幼虫ありていはいえはワジ虫であるが、いる。

一方、調理済みの食べ残しはシマミミズが嫌うので、乾いた土と混ぜて水分調整した後で、庭の草木や芝生の刈ったものなどを詰め込んだコンポストの片隅を空けて、押し込む。こちらは、わざわざ買うまでもなく、自然にここからかミミズがやってきて元気いっぱいに分解作業をしてくれている。最後に、生ごみ入れをブラシで洗う。ほつと一息。ちよつと清々しい気分になる。

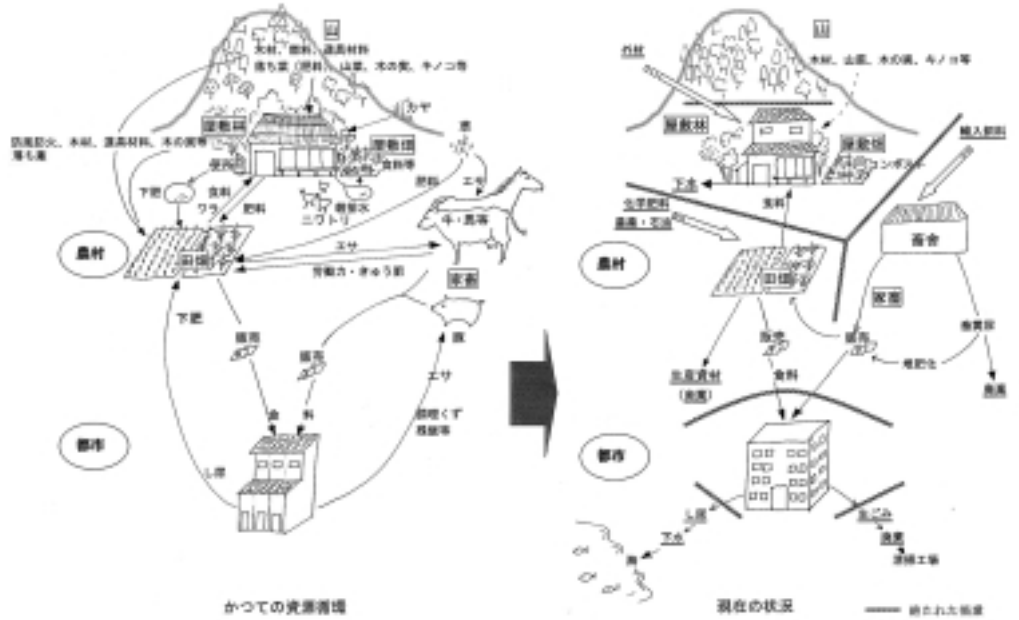
これが、私の生ごみ堆肥化の毎日である¹⁾。我が家では、一五年にわたる紆余曲折の末に、現

在はミミズコンポストと普通のコンポストの二種類でおこなっている。三年前に庭のある家に引越してから、かなり楽になった。『我が家では』と書いたがやっているのは私だけである。四歳になる上の娘は、『これはミミズのご飯だよ〜』などと声をかけてくれることはあるが、夫は『我関せず』という様子である。

「生ごみを堆肥化する私」の視点

1) 京都市の調査によると、私たちが排出する家庭ごみのうちの約四割が生ごみである²⁾。手をつけられずに捨てられる食品も少なくない。

生ごみの堆肥化という作業は、連続と、そして細々と、主に農家や庭を持つ世帯を中心に続けられてきた。有機資源の有効利用の観点からである。



大きく変わった有機性資源の利用循環 出典 吉野ら「台所が結ぶ生命の循環」筑波書房(1999) 改訂版

近年は、生ごみの臭いや始末を嫌がる向きでも関心が高まり、家庭用生ごみ処理機が普及してきた。「キッチン三種の神器」(他は、IHカップキッチンと食器洗浄機)と銘打つメーカーもある。乾燥させるもの、分解消滅させてしまうものなど、堆肥化といつよりは文字通り「処理」を目的と

した機種も多い。さらには、生ごみをシンク下で破碎しながら水と一緒に流してしまつたイスボナーも、都心のマンションを中心に普及してきた。まるで水洗トイレの生ごみ版である³⁾。

一方、事業系ごみの有料化に伴い、外食産業などの事業者も生ごみ堆肥化に取り組むようになってきた。ごみ収集処理に係るコストの節約に加えて、環境への配慮というイメージアップにもつながることが期待されている。一時期、大変な話題になったごみ焼却場におけるバイオキシン発生の問題も、生ごみの脱焼却化の後押しとなった。地域のポランテニアによる、あるいは自治体ぐるみで、生ごみの収集、堆肥化と農家への頒布(そしてさらには農産物の地元への販売)などの取り組みも増えてきた⁴⁾。

「このように、生ごみの堆肥化はさまざまな形をとりながら今日行われているが、個人的な取り組みではなかなか活動が広がりにくいし、孤独な取り組みに挫折もしやすい。グループや地域ぐるみで取り組み方が、成果も見えやすく挫折も少ないだろう。しかし、自治体などでの『ゆる目的』な取り組みの経験から導き出されるのは、やはり、ごみと前処理(とくに分別)をする参加者各々の存在の重要性である。一人でやろうとも、集団でやろうともやはり、私が生ごみとどう向き合うのか、ということが重要なのである。

そこで本稿では、『生ごみを堆肥化する私』という存在を振り返ってみたいと思う。そこに、生

「ごみ堆肥化」という取り組みの特異性や意味が見えてくるのではないかと思つたからである。

「生ごみは腐敗するもの」と自覚する

生ごみの最大の特徴は、どんどん腐敗していくことだ。生ものであり、生物的反応をする。また、その反応過程も一定ではなく、気温、水分量など、さまざまな要因に左右される。ペットボトルや空き缶、古紙など、他のリサイクル資源との違いは、「この一点」に尽きる。

置いておく端から傷んでいく。これは、全くやりきれないことである。早く腐敗のプロセスから進んでプロセスに置き換えてやらないといけない。最近になって、ようやく匙加減がわかってきたような気がするが、最初はやり方もよくわからず、よく腐らせていた。水分が多すぎてヘドロ状になる。あるいは、前述のアメリカカミナブの幼虫が大量発生する。これは本当におぞましい事態である。初めてこれを体験したとき、私は卒倒しそうになった。この大量のウジ虫を何とかしなければと回らぬ頭で湯をひたすら沸かしては虫たちにかげ、絶滅を目論んだ。しかし、冷静な対応としては、前者も後者も、乾いた土などをよく混ぜて水分調整をし、腐植化のプロセスと同じ『腐』を使うが、こちらは有害物質を発生させない形で微生物に分解・発酵してもう一回プロセスである(戻りの)を待つしかない。このような失敗をして、生ごみ堆肥化から撤退した人も数少なくないだろう。

「エコライフ」という生活者価値

NPO法人有機農産物普及・堆肥化推進協会が委託を受けて実施した「家庭の生ごみ堆肥化推進に関する消費者・市民の意識調査」(6)では、そんな生ごみ堆肥化実践者のため息が聞こえてくる。回答者は、堆肥化をしている人が二六一人(四パーセント)、以前やっていたが今は止めた人が二五六人(二五パーセント)、やったことがない人が二〇二人(三三パーセント)であった。全部で六一九人が、実践中の人でも、止めたくなくなったことがある人が四割近くおり、これは私の想像より少なかったが、その気持ちを押しとどめているのは、「環境のために」といつ、非常にまじめな心持ちである。

また、途中で堆肥化をやめた人たちの間で、生ごみの否定的なイメージ(くさい、汚い、など)が強いことが気になった。失敗の経験が、さらに生ごみを忌避する結果を生んだことが窺われる。失敗して挫折した、という無念さと、失敗の過程での臭いや虫の発生というシミュレーションが二重に覆い被さっているのだらう。「止めよう」と思ったことのある人たちが「その紙一重に比べるといえるかもしれない」。

私が生ごみ堆肥化をやめなかった理由は何だらうか。意地のようなものもあつたらう。「みとして出すには、保管中の臭いがいやだ」という実利的な理由も大きかった。また、堆肥化を始める「次第に」みとして捨てるのは「じびな」という気持ちにもなつていくのである。

では生ごみの堆肥化を始めて、暮らし方はどう変わったらうか。食べ残しなどが減ったか、というそれは何ともいえない。「これは忙しさを自分のゆとり、の有無の影響の方が大きいようである。

『生ごみ』と十把一からげにされているもの、より細かく分けてみる目ができ、それに伴い、台所仕事の段取りや流れが確実に変わった。また、コンポストの中に生息する、さまざまな小さな生き物たちに親近感を抱えるようになつてきたことも、大きな変化である。コンポストの中には本当にいろいろな生き物がつめ込んでいる。ミミズ箱といつてもシマミミズだけではない。手に取ることはためらわれる外見のものも多いのだが、「がんばつてね」と心の中で声をかけることも多い。あの宿敵アメリカミミズの幼虫に対しても、最近と同じような思いを持つことがある(もちろんだが、数が少ないときに限られるが)。

生ごみが傷んでいくということは、私たちの生物性、身体性も想起させる。くさいものには蓋をするのが、くさいものに自ら対面するのか。私たちの糞尿は、既にトイレを押せば水とともに瞬時に目の前から消える存在になつたが、生ごみは、今、その境界線上にあるといえるだらう。

私たちの身の回りから「自然」が遠ざかつていて久しい。その中で、生ごみと戦う日々は、自分も自然の一部であること、いずれは死んで腐る、格別美しくもない生き物であることを思い出させてくれる、残された数少ない機会であるのかも知れない。

CEL

(1)「これが正しい方法である」と言っているわけではない。注意。外皮などはコンポストに入れば良いのだが、我が家ではコンポストに回せる生ごみの量が限られているため、乾いたものは燃えるごみとして出すことも多い。生ごみ堆肥化にはいろいろな方法があり、それを各家庭の事情に合わせてアレンジして、よく生きるための各々。各種方法については拙著「台所が結ぶ命の循環 生ごみ堆肥化をはじめよう」を参照。

生活者が始める身近な「エコライフ」

じめいろいろな「生ごみ本」が出ていたので参照された。

(2)平成二三年度調査、京都市ごみ減量推進会議のHPより。

(3)ティスプザーには、単体のティスプザーとティスプザー排水処理システムの二種がある。後者は、微生物による分解処理槽を持つが、前者は、ただ破碎して下水に流し込むだけであり、BOD(生物化学的酸素要求量)や下水施設への負担が大きい。そのため多くの自治体が、単体ティスプザーの使用を認めない、あるいは自衛を求めている。

(4)山形県長井市、長野県白田町、宮崎県綾町などの取り組みは有名である。しかし、全国約三千の自治体で、生ごみ堆肥化事業を実施中または実施を検討している自治体は、まだ七〇ほどである(株式会社「エコー」二〇〇三年八月号九九号より)。

(5)少し視点をずらし、日本全体の窒素の循環の現状をみてみると、日本は窒素の流入過多に陥っている。つまり輸入される飼料や食料が大量なため、それを食べる家畜の糞尿や食べ残しの食品を考えると、堆肥化しても処理しきれないほどの窒素が集まっているといつことである。そこで、生ごみ堆肥化ばかりではなく、家畜の飼料化やバイオガス化などの取り組みも進められていく。

(6)日本土壌協会「平成二三年度都市近郊有機性資源循環利用推進事業報告書(二〇〇二)より」。

(7)先に述べたように、生ごみの堆肥化で最も基本となるのは、生ごみを有効利用したい、と考える無数の「個人」。私の存在である。生ごみの堆肥化を自治体ぐるみで行うかは別として、その点について、やってみよう、と考える意欲ある人たちを、しっかり応援し、支える存在は不可欠だし、自治体に期待される役割でもある。

吉野 馨子(よしのけいこ)

一九九〇年京都大学大学院(熱帯農学専攻)修了。国際協力事業団(現国際協力機構)シニア専門員、(社)農村生活総合研究センター研究員等を経て、現在は大学に在籍しつつ研究を続けている。専門分野は生活資源論。国内外の自給的生産(サブシステンス生産)や資源の循環利用など、生産と生活をまたがる営みを主な研究テーマとしている。主な著書は、『台所から始まる堆肥づくり』(共著、筑波書房)、『パンクラーテシユ農村開発実験』(共著、コモンズ)など。